

就学前教育における愛情の役割

ダニエル・A・プレスコット

この論文は一九五六年にアテネで開かれた幼児教育世界会議において、メリーランド大
学児童研究所名誉所長ダニエル・A・プレスコット氏が述べた講演である。その演題は今
回の研究テーマと直接関連があるので、許可を得て本誌に掲載した。一九六一年以来、幼
児教育世界会議（O M E P）では、就学前（pre-school）の子どもという名称のかわりに、
初等教育前（pre-primary）の子どもという名称を用いはじめている。

科学者たちは、人間の病気や不幸を研究しているうちに、重要な問題をしばしば発見することがある。すなわち、ある事柄が悪化すると、その原因が追求される。その結果、否定的な面が明らかになると、逆に、なにが必要かという積極的な面がある程度理解されるようになる。愛情の問題についても同様なことがいえる。

幼児の健康や発達の問題を取り扱う研究者は、過去三〇年間にわたって、幼児期の情緒的不適応や、性格的欠陥をもたらす发育障害の原因を明らかにするために、身体的、経済的、心理的要因を熱心に追究してきた。そしてこれらの不幸なできごとが、なに

かの要因の不足によるものであることを、しばしば発見してきた。そして最近では、愛情の不適切な表現が、発達障害の重要な原因のひとつであると考えようになってきている。

愛情とはどのようなものであり、また、愛情は人間の成長発達において、どのような積極的役割を果たしているのだろうか。これらのことを詳しく知るために、次にいくつかの研究を引用したいと思う。不適応を改善し、人間の可能性を十分に発揮させる力の性質を明確にとらえることができなければ、愛情の欠乏によって生じる不適応や発達の障害について述べても役にたたないであろう。

研究資料について

アメリカ合衆国では、過去三〇年にわたって、赤ん坊の出生は、家庭よりも病院で行なわれるのが習慣になっている。このために母親と赤ん坊は、かつてよりも、いっそう行き届いた医療的保護が受けられるようになった。そして産婦と乳児の死亡率も、いちじるしく減少した。しかし、出産が産院で行なわれるようになってから、母親と赤ん坊が同じベッドでねることや、同じ部屋で時を過ごすことが許されなくなり、赤ん坊は母親から引き離されて、数日間は育児室で他の赤ん坊と一緒に育てられるようになった。ある間隔を置いて赤ん坊は母親の部屋に運ばれて授乳されるが、すぐに育児室に戻される。そして特別の訓練を受けた看護婦によって欲求が満たされる。

このような状態で育てられると、多くの子どもたちは栄養障害をおこし、時には「マラスマス」(消耗しつくすという意味)と呼ばれる症状を示すことがある。この症状は一九四二年にバクウィンによって報告された。その後、ニューヨークのマーガレット・リブル博士は、この現象に関する数冊の著書と論文を出版した。それ以前に、精神医であるディビッド・レヴィ博士は、一九三七年の *American Journal of Psychiatry* に「基本的愛情飢餓」という論文を発表している。彼はこの論文で、乳児や幼児は食物と保健衛生的な保護だけで十分に成長するものではなく、心身の健全な発達のためには、どうしても愛情と愛撫と、そして母体と

の接触が必要であると主張した。また、ヘバン・ブラウンは母乳を与えることが子どもの心身の健全な発達のために、いかに大切であるかを強調している。このようなことから、愛情の欠乏と、自然な愛情にもとづかない授乳法は、乳児の栄養障害の一因であると思われる。

子どもの発達における愛情の重要性を示す別の種類の研究資料がある。戦争と戦後の混乱は、数百万の子どもの家庭生活を破壊し、そして数千の孤児をつくりだした。両親をなくしたこれらの子どもたちを保護するために、多くの国では施設を増設したが、これらの施設の養育条件は、家庭における子どもの養育条件に比べて、非常に劣っていたので、施設児の身体的、精神的、情緒的発達に対して、多くの科学者たちの関心が向けられるようになった。

ドロシー・バーリンガムとアナ・フロイドの共著「家族のない子どもたち」、ウィリアム・ゴールドファーブが *American Journal of Orthopsychiatry* に発表した一連の論文、ジョン・ボウルビィが一九五一年に世界保健機構(WHO)のモノグラフとして出版した著書、ひきつづき一九五三年に *Journal of Mental Science* に発表した同博士の論文、ビヤーズ、オバーズ、レーネ、スピッツらによる一連の有益な学術論文などは、両親からの愛情が得られない幼児は、元気を喪失し、身体的にも知的にも充分な成長が困難であることを明らかにしている。また施設で育てられると、

子どもたちは不健全な情緒的反應を示すと報告されている。しかし幸いなことに、ある特定の成人と、親密で継続的な接触が得られるような施設で保護された子どもには、このように有害な障害が認められなかったといわれている。いずれにしても、子どもが立派に成長するためには、単に栄養と身体的な保護と組織的な指導だけでは不十分であつて、それ以外のなにかが与えられねばならないことを多くの研究資料は示しているのである。「愛情」と呼ばれる一対一の人間関係と、この愛情的結びつきにもとづいた日ごとの相互関係が、健全な発達に必要な情緒的必要条件をみたくすものである。

就学前期の子どもの発達における愛情の役割を証明する第三の研究資料は、文化の異なつた家庭環境や養育条件を研究する文化人類学者から得られている。

ウエイン・デニスの「ホビ族の子ども」、マーガレット・ミードの「南太平洋の島国から」、アッシュレイ・モンターグの「人間発達の方向」は、この分野の代表的な文献であるが、いずれも、異なつた文化的環境における養育法と、それらが性格形成に及ぼす心理的影響について詳しい資料を提供している。アッシュレイ・モンターグは、文化人類学者たちによって報告された資料を次のように要約している。

「多くの民族についての観察と研究によつて、釣合のとれた協力的な成人の性格は、おもに欲求不満の経験によつて形成されるも

のであることを、われわれは見いだしている。また、これとは逆に、釣合のとれない非協力的な成人の性格も、幼児期において最大限の欲求不満と、最小限の欲求満足を経験した結果であるといえる。」注1

さらにモンターグは、愛情によつて幼児の満足は最大限に達し、愛情の欠乏によつて幼児の欲求不満は最大限に達することも明らかにしている。

科学的研究にもとづいたこれら三種類の研究資料は、乳児や幼児の十分な成長と、健全な性格の発達にとつて、愛情が絶対に必要なものであることを示している。

愛情とはどのようなものか

健全な成長のために乳幼児が経験しなければならない人間関係を、私は「愛情」と名づけている。「愛情」という用語が、果たして適当であるかどうかについては科学的な検討が必要であるし、また、その本質の定義についても慎重でなければならない。そこで次のような問題について考えてみよう。

(1) 愛情には実体があるのだろうか。それとも愛情とは、われわれの文化がつくりだした、単なる空想の所産にすぎないのであるか。

(2) もしも愛情には実体があるとすれば、その本質はどのようなものであろうか。

(3)愛情には実体があるとすれば、人間の発達において愛情はどのような役割を果たしているのであろうか。

私は発達心理学、教育心理学、文化人類学、社会学、精神医学の文献や伝記などを讀んだが、発達心理学や教育心理学の文献には「愛情」という言葉がほとんど使われていなかった。たとえその言葉が用いられている場合でも、その用語について定義を述べている文献はなかった。もしも愛情には実体があるとすれば、人間の生活に及ぼすその影響を慎重に検討し、どのような条件が愛情の影響力を強めるかを研究しなければならぬ。これとは逆に、もしも愛情には実体がないとすれば、一体なぜ語り草の中で愛情がそれほど強く表現され、それほど無残に人の希望をくじき、それほど人の気持ちをまどわせるのであろうか。いずれにしても愛の本質に関する科学的な研究資料は、あまりにも少ないのが現状である。

まず最初に、数冊の著書の中で述べられている愛情についての考えを紹介しよう。ブレッケンリッジとピンセント、ストラングとパーカー、およびコウニンとライトは、それぞれ愛情には実体があると考えている。彼らによると、愛情は行動、発達、および適応に対して強い影響力をもっている。愛情の積極的な面については、彼らはばく然としたことしか述べていないが、愛情の欠乏や愛情表現の不適切さなどの否定的な面での影響については、いろいろな事実を指摘している。また、クルック・ホーンやマレー

も、性行動や家族関係について多くの研究を報告しているが、私が今ここで取り上げているような愛情の問題についてはふれていない。

ジェーム・ブランドは、愛情を実存的なものとみなしているが、愛情についての定義はしていない。彼の見解によると、愛情は子どもの基本的な不安定感と所属感を形成するための役割を果たしている。不安定で、愛されていない子どもは、不安と混乱の状態におちいり、その反動として攻撃的な行動を示す。彼らが親や社会から教育やしつけを受けたり、また独立を求めたりする時に、彼らの不安定な心理的混乱が、はっきりと表現されることがある。

ハリー・スタック・サリバンは愛情を次のように定義している。

「他人の満足や安定が、自分自身の安定と同様に重要なものと感ぜられる時、愛情が生まれたといえる」注²

人の心に愛情が生じると「人々の中に共通に存在する人間性を理解できるようにする」とサリバンは述べている。

次にオーバーストリートの言葉を引用しよう。

「愛情とは、相手の人間を所有することではなくて、相手を承認することである。すなわち、相手の人間性を最大限に認めることである。法律や依存的関係や所有感によって関係を結ぶことは、決して相手を愛しているのではなく、相手を従属させようとして

いるのである。われわれが純粹の愛情を経験すると、善意にもとづいた包容力をもつようになる」注3

一般に用いられている「愛情」という言葉は、あまりにもばく然としているため、フロムは「創造的愛」という新語をつくりだした。フロムによると、子どもに対する母親の愛も、人間に対するわれわれの一般的な愛も、異性間のエロティックな愛も、本質的には同じだと考えられている。いろいろな形の創造的愛には、基本的なある種の要素、すなわち、保護、責任、尊敬、理解が共通に認められる。彼は次のように述べている。

「保護と責任の観念は、愛が活動的なものであって、単なる熱情ではないことを示している。働きかけて、なにかを生みだすことが愛の本質である・・・愛する者に対する尊敬と理解とをとともなわない愛は、支配と所有の欲望に変わるであろう。尊敬と比類のなき・・・愛とは二人の人間が誠実さを保ちながら、互いに親密の情を示しあうことである・・・相手の心の底にふれ、相手を最高のものと思うことが愛することである」注4

フロムはまた、他者に対する愛と、おのれに対する愛とは、別個のものではないといっている。

「自己の生活、幸福、成長、および自由を求める主張は、他者を愛する能力によって決定される・・・他者を創造的に愛し得るものは自分自身をも愛する・・・利己主義者は自分を大いに愛しているのではなくて、むしろ、あまりにも自分を愛していないの

である。実際には彼は自分自身を憎んでいるといってもよいであろう。当然の結果としてこのような人間は不幸であって、生活からなにかの満足を得ようとしてむだな努力を続けるであろう・・・」注5

自己に対する愛（自尊の念）、他者に対する愛、および人類に対する愛に関連した文献をまとめるにあたって、私の心を強くとりえたのは、人類に大きな貢献をした三名の偉人の生涯と、その著書である。その三名とは、賀川、ガンジー、シュバイツァーであるが、次に彼らの見解を紹介しよう。

賀川は次のように述べている。

「愛はすべてのものを目ざめさせる・・・創造とは愛を追求するわざである・・・愛こそ神の本質である・・・社会生活において人々は出会い、そして物質的な手段によって愛しあう・・・愛は美しく飾られている・・・愛によって経済生活は精神的な内容をもつようになる・・・真実の社会の構成は、愛にもとづいた教育によってのみ達成される・・・愛は活動的なものである・・・なにも存在しないところに、なにかをつくりだす力をもっている。もしもわれわれが経済学をこのような角度から考察するとすれば、経済学の研究は愛の科学となるであろう・・・芸術は外見的な美を創造しなければならぬが、芸術そのものの中に愛がなければならぬ」注6。

愛の社会的、政治的実践は、現代のインドに、いろいろな奇蹟

をもたらししている。次にガンジーの言葉を引用しよう。

「真に非暴力的であるためには、私は自分の敵を愛し、たとえ相手が私を打つても、私は彼のために祈らなければならない……われわれは法令や制度を攻撃することはできるが、人間を攻撃してはならない。われわれ自身が不完全であるから、われわれは他人に対しても寛容でなければならない……許すことは罰を与えないことよりも、はるかに立派な行為である」注7

ガンジーは地主に次のようなことを述べたことがある。

「地主は単なる地代の集金人であることをやめるべきである。彼らは借地人の保護者となり、信頼される友とならねばならない。地主はまた農民に、ある程度の保有権を与え、農民の福祉を考え、農民の子どもたちのために良い学校を建て、成人には夜学を設け、病人には病院と治療所をつくって保健衛生の向上をはかり、その他いろいろな方法によって、地主は農民の友であることを示さなければならない」注8

神は愛であり、神の存在は行動によってのみ証明できることをガンジーは強調したのである。

「信仰は言葉によってではなく、生活を通して示されなければならない。信仰が生活の中で躍動しておれば、それは自然に他の人に伝わるであろう」注9

過去五〇年間にわたって、世界に不滅の業績を残したもう一人の人物は、アルバート・シュバイツァーである。彼は生命に対し

て深い尊敬の念をもっていた。そして愛こそ宇宙における最大の力であると信じていた。彼は次のように述べている。

「時代の精神とでもいうのか、今日の人間は外から与えられるものを受け入れようとするために、自分自身の考えに対して懷疑的などころがある……しかし、外から与えられる真実を受け入れるためには、自分自身の思考によって真実に到達できるという自信がなければならない……人間は世界と精神的につながりをもち、そして一体とならなければならない。生命と世界について考えるとき、われわれは生命に対する尊敬を必ずもつであろう……愛こそは無限(神)から、われわれにさしこむ霊の光である。究極的なもの、すなわち神において、創造の意志と愛の意志はひとつになっている……愛を通して神の存在を靈感することによって、人間は必要なものを所有することになる」注10

これらの三人はすべて行動の人であった。そして彼らは、ほとんど不可能と思われたことを、今世紀の前半においてなしたげたのであった。これらの人たちは愛(他人への愛、全人類への愛、神への愛)こそが彼らの働きの原動力であったことを一致して認めている。明らかに彼らの愛は「創造的な愛」であった。われわれは今や最初に提出した質問に対して、はっきりとした態度で答えることができる。愛は存在している。疑いもなく愛には実体がある。愛の実存は三人の偉人の行動と、多くの科学者の研究によって、はっきりと証明されているのである。

愛の本質について

さて、愛の本質とはどのようなものであろうか。私は今までに愛についていくつかの論文を書いている。今ここで述べてきた事柄との関連において、私はそれらの論文の要点を述べてみようと思う。

1、愛は愛されるものと常に関連をもっている。愛する者は愛される者の気持ちを察し、その気持ちを分かちあい、そしてその結末に関心を抱く。このことをもう少し詳しく知るために、サリバンの言葉を引用しよう。

「もしある人のことが、自分自身のことと同じように重大になるとすれば、他の人に対する場合とは全く異なった気持ちで、その人に語りかけることができる。そこに自由がある・・微妙な意味が理解できるし、拒絶されることを恐れずに、あらゆる種類の事柄について議論し、合意に達することができる。」注¹¹

2、愛する者は愛される者の幸福と向上に深い関心をもっている。この関心は非常に強いので、愛する者の人格における「自我構造」の一部として重要な意味をもつようになる。今日までの研究資料は、この前提が正しいことを証明している。また賀川、ガンジー、シュバイツァーの生涯も、この前提の正しさを証明しているといえるであろう。彼らは他の人々が自分自身と同様に、あるいは自分自身よりも価値あるものだということを、長年にわ

たる行動によって示したのである。

3、愛する者は愛される者のために役立つことをよるこびとする。愛する者が提供するところのものは、愛される者の幸福と進歩のために用いられる。力、時、金、心、その他すべてのものは、愛される者のために、よるこんで捧げられる。すなわち、愛される者から望まれる時には、愛する者は常に相手のために働くことを意味している。単に愛される者の幸福と成長を望むだけではなく、可能なかぎり、その向上のためにつくさなければならぬ。過去の研究は、この点についても一致した結果を得ているように思われる。

4、また、愛する者は、愛される者に幸福と進歩をもたらす活動に、積極的に参加しようとする。そして相手の個性を充分に尊重して、その望みをかなえてやろうとする。この点についても、多くの研究資料による充分な裏づけがある。

5、愛は家庭において最も容易に得られるものであるが、家庭外のさまざまな人たちにも分かち与えられねばならない。シュバイツァーの場合には、すべての生きものや、宇宙の創造者(神)にまで愛が示された。同様に、われわれに對しても、他の人々や、あらゆる生きものから愛が示されるであろう。もちろん、他のいくつかの資料によって指摘されているように、純粹で完全な愛は、ごく少数の人たちとの交わりにおいてさえも得られにくいものである。しかし、科学的な理解がよりいっそう進歩すれば、

愛の範囲を拡大することは決して不可能ではない。

6 愛の効用は愛されている者に限られているのではなく、愛する者の成長と幸福にも好い結果をもたらす。すなわち、愛は利他的でも、自己犠牲的でも、利己的でもない。愛する者と愛される者の両者を豊かにする力が愛には含まれている。この事実は、われわれの得ている研究資料では必ずしも明瞭に述べられていないが、その意味は十分に感じられる。

7 両親と子どもの関係、子ども同士の関係、成人相互の関係には、エロティックな要素が多少とも含まれているが、愛は必ずしも性的な力や、ホルモンの衝動に深く根ざしているのではない。どのような人間関係であろうと、創造的な愛の本質には関係がないとフロムは述べているが、彼の見解によって、このような考え方は支持されていると思われる。

8 多くの人々は、愛によって人間性や宇宙を支配する力を理解することができる。またそれらと自己との基本的な関係を知ることが出来る。このように、多くの人々は愛によって宇宙と人類に対する基本的な理解が可能になり、また神に対する信仰の基礎が形成される。この考えは、すべての資料によって支持されている。たとえば、プラントは次のように述べている。

「多くの子どもたちは、教会において少年期から、しっかりとした所属感が養われる。この所属感は、家庭において両親から得られるものよりも、不変で確実なものである」注12

その他の資料も、人類と自己との関係や、神が支配する宇宙と自己との関係を理解するのに、愛がいかに重大な役割を果たしているかを暗に示しているものが多い。

今までに指摘した八項目が、愛の本質と、その働きを理解するのに役立つことを私は望んでいる。いうまでもなく、これらの項目は確定的なものではなくて、一つの試案であるにすぎない。もしもこれらの説明が、愛に対する科学的な関心と学術研究とを促進する刺激となれば、この論文の目的は十分に達成されたといえるであろう。

人間の発達における愛情の役割

愛には実体があるのだから、人間の日常生活において実際に役割を果たすことができる。愛の本質に関するわれわれの考え方が正しいとすれば、人間の発達において愛は一体どのような役割を果たしているのだろうか。この質問が今後一〇年間の学術研究によって明らかにされることを私は望んでいる。将来には、この問題に関して多くの専門的論文や著書が出版されることと思うので、これらの学術研究のために役立つような、いくつかの仮説を次に述べてみよう。

最初の仮説は、愛されることによって、人間は基本的な安定感を得るということである。行動や外観に対してではなく、人間そのものが大切にされていると人が感じるとき、本当の意味でのや

すらが得られるであろう。乳児期から老齢に達するまで、つねに大切にされていると感じておれば、たとえ人生においてどのような苦しみを経験しても、不健全なストレスに悩まされないで、常に自己の最善をつくすことができるであろう。

第二の仮説は、愛されることによって、自分自身と他の人との愛し得るようになることである。話すことがほとんどできない乳児でも、感情移入の能力によって、日常生活を通して愛の本質を感じるができる。また児童期における遊び友だちとの密接な交わりも、自然のうちに子どもの幸福感を高めるであろう。さらに成長すると、異性のいるところではホルモンの変化による落ち着きのなさが目立つようになり、幸福感はますます増大する。そして結婚による生き生きとした生活がはじまるまで、このような状態が続く。最初の赤ん坊の誕生によって、神秘と創造のよるこびを経験し、それから数年間にわたる子どもの養育の過程がはじまる。愛情によるこのすばらしい成長の過程は、幼い時に他の人たちから愛された経験のある者だけに与えられた特権である。かつて愛された経験のない人間は、自分自身を大切にすることも、また自分自身を愛することもできない。このような人間は常に不安定で、自分の価値について疑いを抱かずにはいられない。

第三の仮説は、人から愛されたり、また人を愛したりすることが、集団に対する個人の所属感を促進するということである。い

うまでもなく、個人が集団活動において有意義な役割を果たすためには、かなりの知識と技術が必要である。たとえば、集団のなからわしや規則に従って行動ができればならないであろう。人から愛されて育つことと、これらの技術の習得とは、本来なんの關係もないが、愛されたことによって得られた安定感と、人を愛し得る能力とは、集団内において好まれる人格特性をつくりだすであろう。このような幼児や児童は、他の者を支配したり、攻撃したり、敵意をもったり、はずかしがったり、引込み思案になったりする危険性がない。また、このような子どもたちは、他人の失敗や欠陥を追求して、自分を高い地位に引き上げる必要もないであろう。

第四の仮説は、愛されることと愛することが、両親、親族、教師、仲間との一体感を促進するということである。このような一体感によって文化は子ども的人格に容易に取り入れられ、態度と価値観が形成されるのである。愛されていると感じたり、また愛していると感じるときには、相手の人が信じていることを素直に信じ、相手の人から期待されることを学び、また尊敬できる人から励まされると、希望をもって前進する。愛されていない子どもは不安定な感情をもっているため、自らすすんで学ぼうとはしないし、また敵意をもっているため、いわれたことを拒否し、自分の力を試さなければならぬような機会を避けようとする。いうまでもなく、愛する人によって有益な経験が与えられ、また学習

が助けられるならば、愛される者は大きな利益を得るであろう。

第五の仮説は、愛されることと愛することが、非常に不愉快な事態に面した場合の情緒的適応を助けるということである。愛されている子どもは、たとえ失敗したとしても、この失敗のために自分の価値について疑いを抱くほど深い傷を受けるものではない。なぜなら、愛情の結びつきがあるので、安定感がくずれさらないからである。従って、失敗をおかしても、子どもはすぐに安心感をとりもどし、なんどでも試みようとする。これとは対照的に、愛されていない子どもが失敗をおかすと、二重の危険性にさらされる。すなわち、従来の不安定感の上に無力感が加わり、そして世の中が、よりいっそう不愉快なものに感じられるようになる。愛されている子どもは、なにかにおどろかさされると、直ちに自分を愛してくれる人の手にすがりつき、しばらくすると恐怖の対象に接近して、その原因をつきとめようとする。ところが、愛されていない子どもにとって、恐怖は直視できないものであり、また抵抗できないものである。恐怖の対象は、あらゆる方法を用いて取りのぞかれねばならない。もしも恐怖が子どもの心に残ると、肉体の病気や情緒の障害をひき起こす原因になる。罰や年長者からの要求は、愛されている者には耐えられる。なぜなら、それらのことによつて彼らの人間的価値が失なわれる恐れはないからである。従つて、年長者からの罰や要求は子どもによつて考え直され、その意味がわかると問題は簡単に解決されてしまう。と

ころが、これらのことは、愛されていない子どもにとっては、自分が拒否され、また不利な立場におかれた証拠だと思われる。その結果、権威に対する怒りと反抗、有利な立場にある友だちに対する敬意、そして自分自身の価値についての疑問が生じる。

結語

就学前期の子どもの教育における愛情の意義を明らかにしておく。それは次のように要約できるであろう。

1 豊かな愛情（両親間、両親と子ども、兄弟姉妹間）に恵まれた家庭児は、ナースリースクールや幼稚園において、特別の愛情を必要としない。もちろん、これらの場所でも子どもに愛情が注がれても害がないことはない。

2 愛情に満たされない家庭児や、誤った方法で愛されている家庭児は、ナースリースクールや幼稚園において、愛情にもとづいた個人的な人間関係を経験する必要がある。このような人間関係を経験することによつて、将来不適応におちいったり、成人としての愛情生活に失敗したりする危険性が避けられるであろう。

3 ナースリースクールと幼稚園の教師は、それぞれの子どもの行動や欲求を理解するために、家庭における子どもたちの人間関係について、十分の知識をもたなければならぬ。子どもに接して、正しく指導するためには、どうしてもこのような理解が必

要である。

4 それぞれの子どもの情緒的な生活内容について資料を集めるには、慎重な態度でのぞまなければならない。そのためには、ある程度の訓練が必要である。記録は客観的に行ない、そして記録された資料は、慎重な態度で保管すべきである。すなわち、これらの資料を取り扱う者は、確固とした道徳的な責任観念をもっていないなければならない。

5 愛情にもとづいた安定したパーソナリティーの持ち主だけが、ナースリースクールの教師としての適格者である。なぜなら、このような安定感を欠いている人は、ある子どもたちによって必要とされるような人間関係を結ぶことができないからである。

6 ナースリースクールや幼稚園における園長と教師、主任と教師、および教師相互の関係は、暖かくて、協力的で、そして尊敬しあえるようなものでなければならない。教師たちの人間関係のいかんは、子どもたちが生活する園のふんいきに敏感に伝わるものである。

私は、より多くの子どもたちが、愛情と深い理解とによって育てられることを望んでいる。愛は人間に安定感を与え、安定感是他の人に対する尊敬と寛容の精神をはぐくみ、この精神は共通の目的に対する協力を生み出すであろう。共通の目的に対して共

に働くことができることによつてのみ、世界の人たちの間に平和がもたらされるのである。自分を愛するように他の人を愛し、そして尊敬できるような、健全で合理的な人間関係の基礎の上のみ、平和は築かれるものである。

◎注

注1 Ashley Montagu, *The Direction of Human Development* (New York: Harper & Bros., 1955).

注2 Harry Stack Sullivan, *Conception of Modern Psychiatry* (New York: W. W. Norton & Co., Inc., 1953).

注3 H. A. Overstreet, *The Mature Mind* (New York: W. W. Norton & Co., Inc., 1949).

注4 Erich Fromm, *The Art of Love* (New York: Harper & Bros., 1956).

注5 Erich Fromm, *Man for Himself* (New York: Holt, Rinehart & Winston, Inc., 1947).

注6 T. Kagawa, *Meditations* (New York: Harper & Bros., 1950).

注7 Louis Fischer, *The Life of Mahatma Gandhi* (New York: Harper & Bros., 1950).

注8 注7と同書より引用

注9 注7と同書より引用

注10 Albert Schweitzer, *Out of My Life and Thought* (New York: Holt, Rinehart & Winston, Inc., 1949).

注11 Harry Stack Sullivan, *Conception of Modern Psychiatry* (New York: W. W. Norton & Co., Inc., 1953).

注12 James Plant, *The Envelope* (The Commonwealth Fund, 1950).

(聖和女子大学・黒田実郎訳)